

ヘルメスとシビュラ

——シエナ大聖堂舗床に関する一考察

伊 藤 博 明

序

シエナの大聖堂に踏み入る者が最初に出会うのは、中央の舗床に描かれた「ヘルメス・メルクリウス・トリメギストゥス、モーセの同時代人」HERMES MERCURIUS TRIMEGISTUS CONTEMPORANEUS MOYSI と題されたモザイク画である。このヘルメス像は、先駆的な「ヘルメス文書」の校訂版であるスコット編纂の『ヘルメティカ』、及び、画期的なルネサンス・ヘルメス主義の研究書であるイエイツの『ジョルダーノ・ブルーノとヘルメス伝承』のフロント・ページを飾り⁽¹⁾、ルネサンス期におけるヘルメス主義の興隆を視覚的に示しているものとして、研究者の間では夙に有名なものである⁽²⁾。このモザイク画の両側には、内陣に向かって10のシビュラ像が置かれているが、それらは、舗床にはめられた石版が示しているように、1482年から1483年にかけて、オペラ・デル・ドゥオーモ（大聖堂総務局）の当時の長であったアルベルト・アリンギエーリの指示によって、数人の画家によって描かれたのであった⁽³⁾。これらのシビュラ像から少し遅れて、1488年にヘルメス像は、ジョヴァンニ・ディ・ステーファノによって描かれることになるが、それも同様にアリンギエーリの指示を受けていたとされている⁽⁴⁾。本稿の課題は、大聖堂の舗床に描かれているヘルメスとシビュラが意味している分脈を、舗床に刻まれているラテン語章句を詳しく分析しながら、また、当時の思想的・宗教的背景を踏まえつつ明らかにすることである。予め論述の順序を示しておくと、まず古代・中世におけるシビュラとヘルメスについて簡単な予備的考察を行い（I）、次にルネ

サンス期におけるシビュラとヘルメスの受容についてフィチーノを中心に検討し(II)、その後に、大聖堂舗床のシビュラとヘルメスについて論究することにした(III・IV)。

I

シビュラについては、その語源については明らかではないが、ヘラクレイトス(前5世紀)において初めてその名が現れる⁽⁵⁾。元来は、ある巫女を指す固有名であったようであり、アリストパネスやプラトンは単数で言及している⁽⁶⁾。シビュラとは、神に憑かれた狂乱の状態で未来の事柄を予言する者であった。彼女は、最初イオニアのエリュトライに住む者とされたが、他の土地にも現れ、その事情は、一人のシビュラが各地を遍歴した結果として説明された。その後、様々な土地ごとにシビュラが配されることとなり、シビュライとして複数化され、いわば一般名詞の巫女を意味することになった。シビュラの数、2人(マルティヌス・カペラ)、3人(アンソニウス)、4人(パウサニウス)などとされたが、ローマの作家ウェロに至って10人にまで達した。彼が挙げているのは、ペルシア、リビア、デルポイ、キメリア、エリュトライ、サモス、クマエ、ヘレスポントス、ピュリギア、ティブルの各シビュラである⁽⁷⁾。

シビュラの予言はヘクサメーターの詩句として書き留められたが、予言集の編纂については、諸作家によって伝えられている有名な逸話がある⁽⁸⁾。それによれば、前6世紀のソロンの時代、クマエのシビュラは、タルクウイニウス王のところに9巻の予言集をもたらした。王は代金が非常に高価であるのに驚き女の狂気を笑ったが、彼女は予言集の内の3巻を燃やして、残りの6巻に対して同様の金額を要求した。王が呆れて拒否すると彼女はさらに3巻を燃やした。結局、王は残る3巻を最初に彼女が示した値段で買い取ったのだった。この予言集にはカピトリウムのユピテル神殿下の部屋に保管され、必要に応じて参照された。紀元前83年にカピトリウムが炎上し、その時この予言集も焼失したが、各地から証言が集められて新しい予言集が編纂され、アウグストゥス帝がパラティヌスのアポロン神殿に納めた。しかし、この予言集もテオドシウスと

ホノリウス帝の将軍スティリコスの時に焼失した。われわれに伝えられている14巻（内2巻欠）からなる『シビュラの託宣』は、ヘレニズム期のユダヤ教徒とキリスト教徒の手による偽作である⁽⁹⁾。

さて、早くから教父たちは『シビュラの託宣』を「護教論」の中で用いている。例えば、アレクサンドリアのクレメンスには『シビュラの託宣』から多くの引用が見い出されるし、その他、アテナゴラス、テルトゥリアヌス、テオフォルス、オリゲネス等、類例には事欠かない⁽¹⁰⁾。4世紀初頭の偽コンスタンティヌス『聖なる集団への勅書』は、託宣に関して興味深い言及を含んでいる。著者はエリュトライのシビュラの名のもとに長い託宣を引用しているが、託宣の各行の最初の文字をつなげると「イエス・キリスト、神の子、救い主、十字架」となることを指摘したのであった⁽¹¹⁾。しかし、他の教父にもまして『シビュラの託宣』を重視し、シビュラを真の予言者と考えていたのはラクタンティウスであった。彼については後にあらためて触れることにして、われわれはヘルメスと「ヘルメス文書」の起源の説明に移りたい。

古代エジプトの神トートは文字と諸学芸の発明者であり、主神ラーの使者であったが、ギリシア人はこの神をヘルメスと同一視した⁽¹²⁾。そしてローマ人はこの神をメルクリウス神として受け継いだ。キケロは『神々の本性について』において、メルクリスは本当は5人いたと述べ、フェネウスの人々によって崇敬されていた第5番目の者について次のように述べている。「彼はアルゴスを殺し、そのためにエジプトに逃れ、そして、エジプト人に法律と文字を伝えたとされている。そして、この者をエジプト人はトートと呼んでいる」⁽¹³⁾。ギリシア人は、ヘルメス神に「三重に偉大な」という意味の「トリスメギストス」なる添え名を与えていたが、前3—後3世紀頃、このヘルメス・トリスメギストスの名を冠した多数の文書群が現れた。これが広義の「ヘルメス文書」であり、その中には占星術的・錬金術的・魔術的作品も含まれているが、宗教的・哲学的作品として重要なものは『ヘルメス選集』と『アスクレピオス』である。それらは後1—3世紀頃成立したとされ、思想的には、プラトン主義・ピュタゴラス主義などのギリシア思想を土台とし、グノーシス主義の影響を受け、また

エジプト的要素も見い出されるといった、独特のシンクレティズムを示すものであった⁽¹⁴⁾。

初期の教父たちにおけるヘルメスへの言及は、アテナゴラスやテルトゥリアヌスに見られる。特にテルトゥリアヌスは、プラトンがエジプトの地でメルクリウスから学んだことを示唆しており、また、失われた「ヘルメス文書」の断片を作品中に引用している⁽¹⁵⁾。そして、「ヘルメス文書」を自己の著作において積極的に活用したのはラクタンティウスであった。彼は『神学綱要』第1巻において、上述したキケロ『神々の本性について』の叙述を引いた後、次のように述べている。メリクリウスは、あらゆる種類の学説に精通していたので「トリスメギストゥス」という称号を与えられた。「彼は、神的な事柄に関する多くの書物を書いたが、その中で彼は、至上で一なる神の權威に言及し、神を〈主であり父〉と呼んでいる」⁽¹⁶⁾。そしてラクタンティウスは、この神の唯一性がシビュラによっても述べられていると続けている。彼は、ウェアロを参照しつつ10人のシビュラの名を挙げ、その各々について注釈を加えた後に、「これらすべてのシビュラは、一なる神のことを布告している」と述べている⁽¹⁷⁾。そして、「唯一で、きわめて卓越し、産出されない一なる神」という託宣を引用している。ラクタンティウスは、その著作中で「ヘルメス文書」と『シビュラの託宣』から多くの個所を引用し、それを自己のキリスト教弁証論の中に組み入れている。彼にとって異教古代の知者ヘルメスとシビュラは、旧約の預言者と共にキリスト教を先駆的に語った者だったのである⁽¹⁸⁾。

中世におけるヘルメスとシビュラの伝統に関して、重要なもう一人の教父はアウグスティヌスである。彼は『神の国』第18巻において、エリュトライのシビュラがキリストについての予言をしたとして、先に触れた偽コンスタンティヌスが伝える、各行の最初の文字をつなげると「イエス・キリスト…」となる託宣をラテン語訳して引用している⁽¹⁹⁾。また彼は、ラクタンティウスが『神学綱要』中に挿入した託宣の断片を、キリストの受難・死・復活を語る託宣としてまとめる作業も行っている。彼によれば、エリュトライのシビュラ（ある人々によればクマエのシビュラ）は「偽りの神々や偶像、またその礼拝者に反

対さえして語っているので、神の国に属する者たちの数に入れられるべき」なのである⁽²⁰⁾。

他方、アウグスティヌスがヘルメスに対して取った態度は、ラクタンテウスと正反対であった。彼は『神の国』第8巻において、アプレイウスの手によるものと信じられていた『アスクレピオス』ラテン語訳の一節を引用しながら「トリスメギストゥスと呼ばれるエジプト人ヘルメス」の偶像崇拜に対して厳しい非難を行っている⁽²¹⁾。彼はまた、エジプトの宗教の終末とそれに対する嘆きが記された『アスクレピオス』の叙述に触れ、それがキリスト教の到来による偶像崇拜の終わりをヘルメスが知っていたことを示していると言う。しかしこのことを啓示したのは、聖なる予言者たちに行った聖霊ではなく、ダイモン（悪霊）だったのである。結局、アウグスティヌスによれば、ヘルメスと預言者や使徒の教えは全く異なるのである⁽²²⁾。

このアウグスティヌスの非難のためか、その後の西洋中世社会においてヘルメスへの言及はほとんど為されることがなかった。他方、シビュラの名はキリストに関する予言を行った者として記憶にとどめられた。ホノリウスはキリストの降誕について預言書や詩篇と共に「異教の書物」が語っていると述べているが⁽²³⁾、チェラーノのトマスの『ディエス・イラエ』においては、シビュラはダヴィデと共に歌われている⁽²⁴⁾。トマス・アキナスも『神学大全』の中で次のように述べている。「多くの異教の者たちによってキリストの啓示が為されたが、アウグスティヌスが述べているようにシビュラもまたキリストについて或ることを予言した」⁽²⁵⁾。

上述したように、ワロによればシビュラは10人おり、ラクタンティウス以降、セヴィリアのインドロスやベーダもワロに従っているが⁽²⁶⁾、中世において特に有名であったのはエリュトライのシビュラとティブルのシビュラであった。前者は、最後の審判を見守る者として（後には受胎告知との関係において）、後者は、アウグスティヌス帝の前で、空中に幼子を抱く処女を顕現させた者として重視されたのである⁽²⁷⁾。中世後期になって、シビュラを12人とするテキストが現れた。それは、『キリストの受肉に関するシビュラの12の預言』

と題された小品で、そこでは、エウロパのシビュラとアグリッパのシビュラが付加されている⁽²⁸⁾。このテキストは、その当時流布していたと推測されている。そして、1481年に刊行されたフィリッポ・バルビエーリの著作においても、同様にシビュラは12人とされたのである⁽²⁹⁾。この二つの作品に収められた託宣は、いずれもキリストに関するものであり、各々の託宣にたいして、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルといった預言者の言葉が対比して記されている。こうして、ラクタンティウス以来ルネサンス期まで、シビュラは預言者と共にキリストに関する予言をした者として一般に理解されていたのである。

II

中世におけるシビュラの図像表現は、ピエトロ・カヴァッリーニによるローマのアラコエーリ教会のフレスコ画（13世紀）や、ジョヴァンニ・ピサーノによるピストイアとピサの説教壇などがあるが、数としては少ない。それが、15世紀になって多く現れ、しかもそれまで一人描かれていたシビュラは複数のシビュラ群として描かれるようになった。われわれの考察しているシエナ大聖堂舗床もそうであるが、他には、ピントゥリッキオによってヴァティカンのボルジア家の部屋（1494）に描かれたものや、ペルジーノによってペルージャのサーラ・ディ・カンピオ（1498）に描かれたものが有名である⁽³⁰⁾。こうしたルネサンス期におけるシビュラの「再生」は、上述したバルビエーリの著作、及びラクタンティウスの著作の刊行に多くを負っていると研究者は指摘しているが⁽³¹⁾、ヘルメスの「再生」をも合わせて考えると、特にラクタンティウスの著作が与えた影響は大きかったと思われる。

ラクタンティウスは、古来よりその筆の流麗さが評判であったが、ルネサンス期においてはその博学さによっても尊重された。サルターティは、彼を「きわめて有名、きわめて雄弁、きわめて博識」と呼び、『神学綱要』の写本を所有していたと推測されている⁽³²⁾。トラヴェルサーリは、『神学綱要』などの著作を自ら写し取り、彼の雄弁さには、古代の人々の誰も、キケロさえ及ばないと述べている⁽³³⁾。その他、ブルーニやマネッティがラクタンティウスを称えてい

る⁽³⁴⁾。彼の著作集は1465年に、イタリアにおける第3番目の印刷本として刊行された。この著作集は大変歓迎され、1500年までの間に15版以上出版されるという成功を収めたのである。

ルネサンス期におけるヘルメスとシビュラの「再生」に関して、まずヘルメスから始めるならば、ルネサンス期の人々はラクタンティウスやアウグスティヌスを通じて彼の名を知っていたと思われる。しかし「ヘルメス文書」とヘルメスに独自の重要性を付与することは、やはり、フィレンツェの「プラトン・アカデミア」を率いた哲学者マルシリオ・フィチーノが『ヘルメス選集』を『ピマンデル』という題でラテン語訳した時から始まった。コジモ・ディ・メディチの命により1464年に完成された彼の翻訳は1471年に印刷され、その後版を重ねてヨーロッパ中に流布し大きな影響を与え続けることになった⁽³⁵⁾。フィチーノは『ピマンデル』につけた「要旨」において、ヘルメスについて次のように述べている。「モーセが生まれた時代に、自然学者プロメテウスの兄弟で老メルクリウスの母方の叔父である占星学者アトラスが活躍したが、この老メルクリウスの甥がメルクリウス・トリスメギストゥスであった。(…)彼についてこのことをアウグスティヌスは書いている。キケロ、そして、ラクタンティウスは、メルクリウスは順に5人おり、5人目はエジプト人によってはトート、ギリシア人によってはトリスメギストゥスと呼ばれた者であると主張している。この者はアルゴスを殺してエジプト人の地に逃れ、そして彼らに法律と文字を伝えたと彼らは付言している」⁽³⁶⁾。

フィチーノは、アウグスティヌスとラクタンティウスの「権威」を引きつつ、まずヘルメスの出自について語っている。そして、フィチーノによれば、このヘルメスが「トリスメギストゥス」、すなわち「三重に偉大な」と呼ばれるのは、哲学者、祭司、王としてそれぞれ偉大だからなのである。そして彼は、「哲学者たちの間で初めて、自然的なものと数学的なものから神的なものの観照へと転向した。すなわち、彼が初めて神の威厳、ダイモンの位階、靈魂の変容について、英知の限りを尽くして論じたのである。それゆえ、彼は神学の最初の創始者と呼ばれた」⁽³⁷⁾。こうしてフィチーノはヘルメスに、オルフェウス、ピ

ユタゴラスと続きプラトンをまわって完成する「古代神学」の「創始者」の地位を与えたのである⁽³⁸⁾。

さて、フィチーノは、自らの著作においてヘルメスに帰される「ヘルメス文書」にしばしば言及しているのではあるが、当面の課題にとって重要なことは、ヘルメスの教説とキリスト教の関係をフィチーノはいかに考えていたかということである。彼は『ピマンデル』の内容について次のように述べている。「メルクリウスは、神的な事柄に関係する多くの書物を書いたが、その中においては、おお、不死なる神よ、驚くべき託宣と同様に隠された秘儀が公にされており、彼は哲学者としてだけでなく、また、しばしば予言者として未来の事柄を語り、歌っているのである。彼は、古代の宗教の滅亡を、信仰の始まりを、キリストの降誕を、未来の裁きを、世の再生を、祝福された者どもの栄光を、罪ある者どもの処罰を予言している。それゆえアウレリウス・アウグスティヌスは、彼が星辰の知識かダイモンの啓示によって多くのことを述べたのではないかと疑ったのである。しかしラクタンティウスは、彼をシビュラたちと預言者たちの間に数え上げることににおいてためらうことはなかった」⁽³⁹⁾。

ここで、フィチーノは、ヘルメスを哲学者・神学者であると共に予言者の一人として語っている。そして、注目すべき点は、アウグスティヌスの見解を批判してヘルメスの名を復権させ、ラクタンティウスに同意しつつ、ヘルメスをシビュラと預言者の間に置いていることである。すなわち、フィチーノにおいてヘルメスは、再び、来るべきキリスト教を予言する者となったのである。

シビュラに関してフィチーノは、中世の伝統的解釈を受け継いでいる。そして、その理解において、ラクタンティウスとアウグスティヌスに多くを負っている。フィチーノは『キリスト教について』において、ラクタンティウスがシビュラの書物の中に「神の子キリストに関する明白な事柄を読んでいる」と述べて、キリストについてのシビュラの証言として多くの託宣を『神学綱要』から引用している⁽⁴⁰⁾。ただしフィチーノは、ラクタンティウスが言及していない、ウェルギリウス『牧歌』中の有名なクマエのシビュラの託宣をキリストの降誕を予言しているものとして引用し注解を加えている⁽⁴¹⁾。アウグスティヌ

スに関してフィチーノは、先に見た各行の最初の文字をつなげると「イエス・キリスト…」となる託宣をアウグスティヌスが引用していることに触れ、次のように述べている。「この詩行の中には、肉体の復活、諸世紀の変遷、審判のための神の到来、恩寵、人間の永劫の罰が記されている。このようなことは、また、メルクリウス・トリスメギストゥスにおいても読まれる」⁽⁴²⁾。ここにおいてもヘルメスがシビュラと同じ予言をしたことを示されている。

ここで、ヘルメスとシビュラに関して、翻訳上の興味深いエピソードを紹介しておきたい。すでに述べたように、ルネサンスにおけるヘルメス主義の興隆は、フィチーノによる『ヘルメス選集』の翻訳・出版から始まったのであるが、1471年の初版を始め、その後のほとんどの版において、『ヘルメス選集』第12冊子の中に次のような記述が見られる。「神は人間と、夜は夢によって、昼はより親密にしるしによって、また、彼に未来を予告するすべてのもの、鳥によって、臓物によって、シビュラによって *per sibyllam* 交わりをかわす」⁽⁴³⁾。この文脈では、シビュラは、神が人間に将来を予見させる際の一つの手段とされているのであるが、ギリシア語原典では、問題の個所は “*διὰ δρυός*” となっており⁽⁴⁴⁾、フィチーノ訳の手稿では “*per sylvam*” と正しく訳されている⁽⁴⁵⁾。

この誤記は、手稿を書き移した者、あるいは、版を組んだ者によって引き起こされたのであろう。しかし、上述したようなシビュラをヘルメスと共にキリストに関する予言する者としたフィチーノの見解を考えると、大変興味深いものと思えるのである。実際、その後の人々の多くは、「ヘルメス文書」の中に未来を予告する者としてのシビュラの名を見い出すことになるのであるし、例えば、ピコ・デッラ・ミランドラは、この誤記をさらに広めることになった。彼は、ローマでの討論会のために執筆した『900の論題』（1486）の一つで次のように述べている。「神は人間に対して、未来の事柄を、六つの力、すなわち、夢、しるし、鳥、臓物、霊、シビュラによって告知する」⁽⁴⁶⁾。

最後に、当時の思想的・宗教的背景に関して、二人の人物に言及しておきたい。その一人は、ルドヴィコ・ラザレッリで、彼とフィチーノの関係は定かではないが、彼もまたヘルメスに魅せられた人物であった。「私は、キリスト者で

あるが、同時にヘルメス主義者であることを恥じない」⁽⁴⁷⁾と言明するラザレリは、「古代神学の創始者」であるヘルメスを時代的にモーセの前にさえ置き、そして、フィチーノよりも大胆に、ヘルメスの言葉をもとにキリスト教の革新を企てようとした。彼のこうした姿勢は、その著作『ヘルメスのクラテールについて』の末尾に置かれた「私は、イエス・キリストをピマンデルの名において誉め称えよう、ヘルメスによって精神と神の言葉が解き明かされたからである」⁽⁴⁸⁾という言葉からも察せられる。

もう一人は、アントニオ・デリ・アリという司教である。彼は、フィチーノと同様に「古代神学」がキリスト教の真理を予示しており、それらの間には、宗教的・哲学的な一致が存在すると考えている。例えば、未刊行の論考『信仰の諸原理について』において彼は、ラクタンティウスの名を引きつつ、シビュラたちがキリストの生と行いを予言したと述べ、続けて、「この真理にヘルメスもまた賛同している。確かに、ウェルギリウスのある詩において、クマエのシビュラはキリストについて語っていると容易に理解されるのである」⁽⁴⁹⁾と述べている。

この二人に触れたのは、フィチーノ以外の者たちのヘルメスとシビュラへの関心を示そうとしたからに他ならない。確かに、ヘルメス主義的改革者とでも言い得るラザレリは極端な例であろう。他方、アリはフィチーノと交流があったにせよ⁽⁵⁰⁾、ラグーサ、フィエーゾレ、ヴォルテッラの各司教を勤め、実際の教会人として一生を過ごした人物である⁽⁵¹⁾。こうした人物でさえも上述したような見解を抱いていたということが、シエナ大聖堂の中にヘルメスとシビュラが描かれることになった当時の宗教的・思想的背景を雄弁に語っていると思われるのである。

III

上述したように、シエナ大聖堂の舗床には10人のシビュラが描かれているが、まず、各シビュラ像のインスクリプションを見ることにしたい。

(1) SIBYLLA DELPHICA DE QVA/CHRYSIPPVS/LIB. DE

DIVINAT. (デルポイのシビュラ、クリシッポスが『予言について』において [述べている])

(2) SIBYLLA CVMAEA/QVAM PISO IN AN-/NALIBVUS NOMINAT. (クマエ [キメリア] のシビュラ、ピソが『年代記』において 名を挙げている)

(3) SIBYLLA CVMANA CVIVS MEMINET VIRGILIVS ECLOG. IV. (クマエのシビュラ、ウェルギリウスが『牧歌』第4巻で言及している)

(4) SIBYLLA ERYTHRAEA/QVAM APOLLODO-/RVS SVAM AIT ESSE/CIVEM. (エリュトライのシビュラ、アポロドロスが彼の土地の者と述べている)

(5) SIBYLLA PERSICA/CVIVS MEMINIT NICANOR. (ペルシアのシビュラ、ニカノルが言及している)

(6) SIBYLLA ALBVNEA QVE TIBVR-/TINA COGNOMINATA EST QVOD/TIBVRI PRO DEO COLEBATVR. (アルブネアのシビュラ、ティブルティナという異名があり、ティブルで神として崇められている)

(7) SIBYLLA SAMIA DE QVA/LOQVITVR ERATOSTHNES. (サモスのシビュラ、エラトステネスが述べている)

(8) SIBYLLA PHRYGIA QVAE/ANCYRAE VATICINATA EST. (プリュギアのシビュラ、アンキュラで予言した)

(9) SIBYLLA HELLESPONTICA IN A-/GRO TROIANO NATA QVAM SCRIBIT/HERACLIDES CYRI TEMPORE FVISSE. (ヘレスポントスのシビュラ、トロイアの地方で生まれた、ヘラクリデスが、キュロスの時代にいたと書いている)

(10) SIBYLLA LYBICA/CVIVS MEMINIT/EVRIPIDES. (リビアのシビュラ、エウリピデスが言及している)

これら 10 人のシビュラの名は、基本的にウァロに従うものであり、そのインスクリプションは、ラクタンティウス『神学綱要』第1巻に依っている⁽⁵²⁾。続いて、ラクタンティウスのテキストとインスクリプションの相違の検討も含めて、

各シビュラを順に考察することにした。

(1) デルポイのシビュラ：プルタルコスによれば、「シビュラの最初の者」であり、マルペッソスかエリュトライに生まれ、サモスに住み、クラロス、デーロス、デルポイを訪ねたとされる。デルポイにはピュティアと呼ばれる巫女たちがいて、アポロン神の神意を伝えた、ということは有名なことであるが、それとの関連が考えられる。シビュラは、左手で装飾された角笛を持ち、そこから炎が出ている。右手は有翼のスフィンクスに支えられた板にのせられているが、その板には、“IPSVM TVVM CO-/GNOSCE DEVM/QVI DEI FILIUS EST.”（神の子である汝の神自身を知れ）と記されている。この託宣は、有名なデルポイの神託のキリスト教的変形であり、ラクタンティウス『神学綱要』にも引用されているもので⁽⁵³⁾、キリストの本性を示している。

(2) クマエ [キメリア] のシビュラ：インスクリプションでは“CVMAEA”と書かれているが、明らかにイタリアのキメリアのシビュラを指している。シビュラは、肩の上に長い髪をなびかせた興奮した様子の女性として描かれ、左手には本を持ち、右手で板を支えている。そこには次のように書かれている。“ET MORTIS FATVM FINI/ET TRIVM DIERVM SO-/MNO SVSCEPTO. TVNC/A MORTVIS REGRESSVS/IN LVCEM VENIET PRIM-/VM RESVRRECTIONIS/INITIVM OSTENDENS.”（彼は、三日の眠りを引き受けた後、死の運命を終え、それから、死より帰り、復活の最初の始まりを示しつつ、光の中に来るであろう。）この託宣も『神学綱要』において引用されており⁽⁵⁴⁾、キリストの復活を表している。

(3) クマエのシビュラ：クマエ（キュメ）のシビュラは、アマルティア、デモピレ、ヘロピレのシビュラとも呼ばれる。アポロン神に仕える巫女としてローマ期においては有名であり、アエネアスの冥府下りに同行し⁽⁵⁵⁾、また、タルクィニアス王に预言集をもたらししたのも彼女である。シビュラは、ヴェールを被った厳しい老女として描かれており、右手には『アエネイス』において歌われている「金葉の小枝」を持ち、左手には3巻の预言集を抱えている。地上では6巻の预言集が火に包まれている。左肩の上で二人のケルビム（？）が板を

支えて飛んでいるが、その中には次のように書かれている。“VLTIMA
CVMAEI VENIT IAM/CARMINIS AETAS. MAGNVS/AB INTEGRO
SAECLORVM/NASCITVR ORDO. IAM RE-/DIT ET VIRGO, REDEV-
NT/SATVRNIA REGNA, IAM/NOVA PROGENIES CAELO/
DEMITTITVR ALTO.”（今やクマエの歌の、最後の時代がやって来る。偉大
なる世紀の秩序が新たに生まれる。今や処女は帰り、サトゥルヌスの王国が戻
ってくる。今や新しき息子が高き天より遣わされる。）この託宣は、インスクリ
プションが示唆しているように、ウェルギリウスの『牧歌』第4歌に見い出さ
れるもので、「新しき息子」は救世主キリストを意味しているとも理解され
た⁽⁵⁶⁾。したがって、託宣自体はキリストの降誕を表していると言えよう。ただ
し『神学綱要』のシビュラのリスト中に、ウェルギリウスへの言及はないし、
また、この託宣をラクタンティウスは引用していない。しかし、上述した中世
後期のテキスト『キリストの受肉に関するシビュラの12の預言』、及びバルビ
エーリの著作には見い出される⁽⁵⁷⁾。

（4）エリュトライのシビュラ：マルペッソス、あるいはエリュトライの出身
でヘロペレの別名があり、トロイア戦争を予言したと伝えられている。ラクタ
ンティウスはこのシビュラについて「他のシビュラよりも有名であり高貴であ
ると考えられている」⁽⁵⁸⁾と述べており、アウグスティヌスが彼女の名によって託
宣を伝えていることは先に見た通りである。こうしたことから、中世において
とりわけ尊重されることになった。奇妙なヴェールを被った、背の高い気品あ
る女性として描かれており、右手に一冊の本を持ち、左手で台座に支えられた
開かれた本を握っている。その本には、次のような言葉が見られる。“DE EX-
CELISO/CAELORVM HA-/BITACVLO RPO-/SPEXIT DOMI-/NVS
HVMILES/SVOS/ET NASCETVR, IN DIEBVS NO-/VISSIMIS DE
VIR-/GINE HEBRAEA/IN CVNABVLIS/TERRAE.”（天の至上の住処か
ら、主は彼の卑しき者たちを眺められた。そして近日中に、彼はヘブライ人の
処女から大地の揺りかごの中で生まれるだろう。）この託宣はキリストの生誕
を予言しているのであるが、『神学綱要』にはその引用がなく、また現存する

『シビュラの託宣』にも含まれていない。しかしこの託宣は『キリストの受肉に関するシビュラの12の預言』とバルビエーリの著作には見い出される⁽⁵⁹⁾。

(5) ペルシアのシビュラ：このシビュラは、時として、カルデア、バビロニア、エジプト、ヘブライのシビュラとも同一視される。普通のヴェールを被った中年の女性は、左手で開いた本を持ち、右手で三本足の台座の上に置かれた板を示している。その板には次のように書かれている。“PANIBVS SOLVUM QVINQVE/ET PISCIBVS DVOBVS HO-/MINVM MILLIA IN FOENO/QVINQVE SATIBIT. RELI-/QVIAS TOLLENS XII/COPHINOS IMPLEBIT/IN SPEM MVLTORVM.”（彼は、わずかの5つのパンと2匹の魚によって干し草の上にいる五千の人々を満足させるだろう。残ったものを取り上げて、多くの人々の希望のために12のかごを満たすだろう。）言うまでもなくこの託宣は、福音書に記されているキリストの奇跡のことを語っているものであり、『神学綱要』においても引用されている⁽⁶⁰⁾。

(6) アルブネアのシビュラ：ティブルの別名を持ち、アニエニス川の岸边にあったティブルで女神として崇められていたという。イタリアにおいて有名であったことは先に述べた。先の尖った帽子を被った優雅な若い女性として描かれており、右手に開いた本を持っている。左肩の上でケルビムが一枚の板を下げており、その中には次のように書かれている。“NASCETVR CHRISTVS/IN BETHLEHEM, ANNVM-/CIABITVR IN NAZARETH/REGNANTE TAVRO PACI-/FICO FVNDATORE QVIE-/TIS. O FELIX MATER CV-/IVS VBERA ILLVM LACTA-/BVNT”（キリストはベツレヘムに生まれるだろう。彼はナザレにおいて、休息の設立者である雄牛が支配しているときに、告知されるであろう。おお、その胸が彼に乳を与える幸福な母よ。）このキリストの誕生を予言する託宣は、『神学綱要』にも『シビュラの託宣』にも見い出せず、エリュトライのシビュラの場合と同様に『キリストの受肉に関するシビュラの12の預言』あるいはバルビエーリからの引用であると考えられる⁽⁶¹⁾。

(7) サモスのシビュラ：このシビュラについては余り知られていない。美しく装飾された衣服に身を包んだシビュラは、左手で開いた大判の本を持ち、幾

分厳しい表情をして立っている。彼女の下に、2頭のライオンの胸部を象った台座の上に板があり、そこには次のようにかかれている。“TV ENIM STVLTA IVDAEA/DEVM TVVM NON CO-/GNOVISTI LVCENTEM/MORTALIVM MENTI-/BVS SED ET SPINIS CO-/RONASTI HORRIDVM-/QVE FEL MISCVISTI.”（愚かなユダヤ人であるおまえは、死すべき者の心を嘲るおまえの神を認めず、刺のある冠をかぶせ、苦い胆汁を混ぜた。）このキリストの受難を表す託宣は、『神学綱要』において引用されている⁽⁶²⁾。

(8) プリュギアのシビュラ：このシビュラについてもよく知られていない。ゆったりとした衣服に身を包んだ若いシビュラは、左手で開かれた本を掲げているが、そこには神の唯一性を表す次のような言葉が書かれている。(A) “SOLVS/DEVS/SVM ET/NON EST/DEVS/ALIVS.”（私一人が神であり、他の神はいない。）この託宣は『神学綱要』において引用されている⁽⁶³⁾。右手で、二本の花を象った柱で支えている板を示している。柱の間には、三人の嘆願者の顔が見えるが、板には、次のように書かれている。(B) “TVBA DE CAELO VOCEM LV-/CTVOSAM EMIT[T]ET, TARTARE-/VM CHAOS OSTENDET DEHIS-/CENS TERRA, VENIENT AD TRIBV-/NAL DEI REGES OMNES, DEVS/IPSE IVDICANS PIOS SIMVL/ET IMPIOS, TVNC DEMVM IM-/PIOS IN IGNEM ET TENEBRAS/ MITTET, QVI AVTEM PIETA-/TEM TENENT ITERVM VIVENT.”（天からラッパが痛ましい声を放つだろう。割れる大地が冥府の混沌をを示すだろう。王たちはすべて神の法廷にやって来るだろう。神自らが正しき者と悪き者を裁き、そして最後に悪しき者を火と闇の中にするだろう。しかし、正しさを保つ者は再び生きることになるだろう。）この託宣は、最後の審判を表している。そしてそれは、『神学綱要』において異なる三個所に引用されている託宣を合成したものである（[1] TVBA… [2] TARTAREVM… [3] DEVS IPSE …）⁽⁶⁴⁾。

(9) ヘレスポントスのシビュラ：ソロンとキュロスの時代に、トロイアの地、

ゲルゲティウムの近くのマルメッソスで生まれたと言われている。優雅な若々しい女性として描かれたシビュラは、左手で開かれた本を持ち、右手で二つの円柱に支えられた板を示している。円柱の前には、狼とライオン（マルゾッコ）が座って握手しているところが描かれているが、これはシエナとフィレンツェの間で結ばれた条約を示唆していると考えられている⁽⁶⁵⁾。板の上には次のように書かれている。“IN CIBVM FEL IN SITIM ACE-/TVM DEDERVUNT. HANC/INHOSPOTALITATIS MOSTR-/ABVNT MENSAM. TEMPLI/VERO SCINDETVR VELVM/ET MEDIO DIE NOX ERIT/TENE BROSA TRIBVS HORIS.”（彼らは、食物として胆汁を、喉の渇きには酢を与えた。彼らはこうしてもてなしの悪い食卓を供するだろう。ところが、神殿の帳は裂け、昼の最中に三時間も闇に包まれて夜になるだろう。）この託宣は、キリストの受難と死を表しているが、『神学綱要』における二個所の引用をつなぎ合わせたものである（[1] IN CIBVM… [2] TEMPLI…）⁽⁶⁶⁾。

(10) リビアのシビュラ：パウサニアスによれば一番古いシビュラとされる。彼女は黒人の若い女性として描かれ、左手で巻紙を持ち、右手で開かれた本を持っている。そこには次のように書かれている。(A) “COLA-/PHOS/ACCIPI-/ENS TA-/CEBIT./DABIT/IN VER-/BERA/INNO-/CENS/DORSV-/M.”（彼は、打たれながら黙しているだろう。彼は、鞭に無垢の背中をさらすだろう。）また左下には、二匹のからまった蛇を象った台座の上に板が置かれており、そこには次のように書かれている。(B) “IN MANVS INI-QVIAS/VENIET. DABVNT DEO/ALPAS MANIBVS IN-/CESTS. MISERABILIS/ET IGNOMINIOSVS/MISERABILIBVS SPEM/PRAEBEBIT.”（彼は不義なる手に落ちるだろう。彼らは神に対し汚れた手で手打ちを加えるだろう。そして、惨めにも侮辱された者は、惨めな者たちに希望を与えるだろう。）キリストの受難を表すこれらの託宣は、『神学綱要』における数個所の引用から部分的に取られてまとめられたものである（A [1] COLAPHOS… [2] DABIT… B [1] IN MANUS… [2] MISERABILIS …）⁽⁶⁷⁾。

以上、われわれは、シエナ大聖堂舗床に描かれた 10 人のシビュラが述べている託宣について詳しく見てきた。個々の託宣は、キリストの本性・降誕・奇跡・受難・磔刑・復活、そして最後の審判を予言しており、全体としてキリストに関する託宣として統一されている。こうして、異教古代の様々な地においてシビュラたちは、まさに普遍的宗教としてのキリスト教を予言したものであるとして聖堂内に置かれているのである。

最後に、各託宣の源泉についてまとめて考察しておきたい。すでに明らかにされたように、10 人の名はラクテンティウス『神学綱要』を通してウェアロに負っており、各インスクリプションは、クマエのシビュラを除いて『神学綱要』から取られたものである。各託宣については、その多くは『神学綱要』における『シビュラの託宣』の引用であるが、例外は、クマエ、エリュトライ、及びアルブネアのシビュラの託宣である。すでに指摘したように、これらは、『キリストの受肉に関するシビュラの 12 の預言』とバルビエーリの著作に見い出されるものであるが⁽⁶⁸⁾、ウェルギリウス『牧歌』に依っているクマエのシビュラの託宣は独立に知られていたとも考えられる⁽⁶⁹⁾。また、バルビエーリにおいてはエリュトライのシビュラの託宣がヘレスポントスのシビュラに帰せられている点から、『キリストの受肉に関するシビュラの 12 の預言』が参照された可能性が高い。そして、『神学綱要』からの引用にあたっては、アウグスティヌス、そして、フィチーノの叙述が参照された可能性がある。というのは、アウグスティヌスは『神の国』において『神学綱要』の諸箇所から引いて託宣をまとめたが、その託宣が再び分割されて各シビュラに割り当てられているのである。またフィチーノは『キリスト教について』において、アウグスティヌスのまとめた託宣をそのまま引用しており、さらに『神学綱要』からいくつかの託宣を引用しているが、その中にすでに見た舗床に記されたシビュラの託宣があるのである（ただしラテン語訳は一致していない）⁽⁷⁰⁾。対応する託宣が多いことからそこに影響関係を想定することは可能であろうが、しかし、10 のシビュラを舗床に描かしめた者（アリンギエーリ）は、あくまでも自己の選択によって『神学綱要』から託宣を選び出し、また、必要に応じて他の文書からも託宣を引き

つつ、各シビュラに割り当てたと考えられる。その作業には明確な意図があったのであり、その意図とは先に述べたもの、すなわち、キリストに関する託宣を述べるものとしてシビュラたちに統一性を付与することであった。

IV

シエナ大聖堂の舗床に描かれたヘルメスは、恭しく態度で臨む人物に一冊の書物を手渡しているが、その開かれた頁には次のような言葉が見出される。“SVSCI-/PITE/O LI-/CTE-/RAS/ET LE-/GES EGIP-/TII”（おお、エジプト人よ、文字と法律を受け取れ）この一節は、先に引用したキケロ『神々の本性について』における「エジプト人に法律と文字を伝えた」*Aegyptiis leges ac letteras tradidisse* という叙述に由来している⁽⁷¹⁾。それは、ラクタンティウスが『神学綱要』第1巻において伝えており、フィチーノも引用している。トート＝ヘルメスが文字と学芸の発明者とされていたことは先に述べた通りで、その意味でこの一句はヘルメス・トリスメギストスを示すのに大変適切であると思われる。ヘルメスから書物を受け取ろうとしている者の背後にヴェールを被った人物が控えている。この両者が何者であるかについては従来より議論があるが、イエイツのように前者をモーセ、後者をアスクレピオスかタトと考えるのには無理があると思われる⁽⁷²⁾。前者はヘルメスから文字と法律を受け取るエジプト人、後者はその知恵を受け継ぐギリシア人（プラトン？）と一応考えておきたい。「ヘルメス・メルクリウス・トリメギストゥス、モーセの同時代人」というインスクリプションはヘルメスの古代性を示すためだけのものであり、それは、アウグスティヌス、あるいはフィチーノの記述によっていると思われるのである⁽⁷³⁾。

このヘルメスは、エジプトを象徴するスフィンクスによって支えられた板に左手を乗せているが⁽⁷⁴⁾、そこには次のように記されている。“DEUS OMNIUM CREATOR/SECUM DEUM FECIT/VISIBILEM ET HUNC/FECIT PRIMUM ET SOLUM/QUO OBLECTATUS EST ET/VALDE AMAVIT PROPRIUM/FILIUM QUI APPELLATUR/SANCTUM VER-

BUM.”(万物の創造主である神は、自らと共に可視的な神を造り、そして、これを第一の、彼が楽しむ唯一の者とした。そして彼は、聖なる言葉と呼ばれる自己の子を非常に愛した。)すでに諸研究者が指摘しているように、この文章はラクタンティウス『神学綱要』第4巻第6章に引用されている『アスクレピオス』ギリシア語原典の一節と対応している。ラクタンティウスはこの章で、神は世界を造る前に「聖なる不滅の霊」を産み出し、それは「子」と呼ばれると述べている。神はその後「天使」と呼ばれる他の者を造ったが、この霊こそが「神の名」にふさわしいものである。この「至上の神の子」については、預言者たちが一致して述べているだけではなく、またトリスメギストゥスの予言とシビュラたちの託宣も証明しているとラクタンティウスは述べ、次のように続けている。

“Hermes, in eo libro qui Λόγος τέλειος inscribitur, his usus est uerbis : ὁ κύριος καὶ τῶν πάντων ποιητής, ὃν θεὸν καλεῖν νενομίκαμεν, ἐπεὶ τὸν δεύτερον ἐποίησε θεὸν ὁρατὸν καὶ αἰσθητόν... ἐπεὶ οὖν τοῦτον ἐποίησε πρῶτον καὶ μόνον καὶ ἓνα, καλῶς δὲ αὐτῷ ἐφάνη καὶ πληρέστατος πάντων τῶν ἀγαθῶν, ἡγάσθη τε καὶ πάνν ἐφίλησεν ὥς ἴδιον τόκον.” (ヘルメスは『完全なる言葉』と題されている書において次のように言っている。「万物の主にして形成者を、われわれはふさわしくも神と呼ぶが、それは、彼が第二の、可視的で感覚的な神を造ったからである。(…)神は、それを、第一の、唯一の、一つの者として造ったので、彼は美しく、あらゆる善に満ちている者と見えた。そして、神は彼に驚嘆し、自己の子として非常に愛したのである」。⁽⁷⁵⁾ 先のラテン文は、明らかにこの断片から取られたものであると考えられる。ただし‘SECUM’はギリシア語原典に従えば、‘SECUNDUM’となるべきものであろうし⁽⁷⁶⁾、‘QUO OBLECTATUS EST’は‘QUOD ADMIRATUS EST’とでも訳すべきであろう。また‘QUI APPELLATUR SANC-TUM VERBUM’は、ラクタンティウスが伝えている断片には現れていない重要な付加として考えられるであろう。さて、それではこのラテン文は全体として何を意味しているのであろうか。われわれは、『アスクレピオス』断片自体か

ら考察を始めることにしたい。

現存しているラテン語訳『アスクレピオス』の当該箇所を参照すると「可視的で、感覚的な第二の神」とは「世界」を意味していることがわかる。そこでは、神は「第二の神」を造った後にこの「第二の神」を観照する存在として人間を造ったと述べられている。世界を「第二の神」と表現することは、「ヘルメス文書」の他の箇所にも見い出され⁽⁷⁷⁾、ここで解釈に疑問の余地はないように思われる。他方、ラクタンティウスは「神の子」である「第二の神」を世界に先だって存在する「聖なる不滅の霊」としていた。この点でラクタンティウスは『アスクレピウス』断片に原文とは異なる解釈を加えていると言えるであろう。続いてラクタンティウスは「神の子」に関して、シビュラの証言とソロモンの言葉を引き、最後に「神の子」をトリスメギストゥスは「神のデミウルゴス」と呼び、シビュラは「計画者」と呼んだと述べてこの章を終えている⁽⁷⁸⁾。「ヘルメス文書」において「デミウルゴス」（造物主）とは、例えば『ヘルメス選集』第1冊子で述べられているように「神なるヌース」から産み出される、もう一人のヌースであって、火と霊気の神であるこのヌースが7人の支配者（遊星）を産出するのである⁽⁷⁹⁾。ここで、世界に先立って存在する霊としての「神の子」は「デミウルゴス」との関係を作り結ぶ。すなわち「神の子」とは、いわば宇宙的な創造力を表わしているのである。

さてラクタンティウスは、続く第7章で再び「神の子」を「デミウルゴス」と呼んだ後にさらにその「名」を問いかけて、次のようなヘルメスの言葉を引用している。“*ἔστιν γὰρ τις, ὃ τέκνον, ἀπόρρητος λόγος σοφίας ὁσιός τε περὶ τοῦ μόνου κυρίου πάντων καὶ προεγνωμένου θεοῦ, ὃν εἰπεῖν ὑπὲρ ἀνθρώπων ἐστιν.*”（息子よ、実際、万物の唯一の主であり、万物の前に知られる神の傍らに、人の言う力を越えている、言表しえない聖なる知恵のロゴスがある。）⁽⁸⁰⁾「神の子」は、今度は「知恵のロゴス」と呼ばれている。そしてラクタンティウスはすぐ後で「それは人間たちの間ではイエスと名付けられる」と述べているのである。「デミウルゴス」と呼ばれる、神の傍らにあって創造する霊はロゴスであり、またそれはキリストでもある。こうして、キリストは宇

宙論化され、ロゴス＝キリスト説が提示される⁽⁸¹⁾。

第8章のラクタンティウスの記述によれば、キリストは「二度生まれた、最初は霊において、後には肉において」。「彼は初めに神の子であり、肉にしたがって新たに再生した」⁽⁸²⁾。「神の子」は「神の言葉」として生まれ、他方、天使は「神の霊」として生まれた。われわれが「言葉」*verbum sive sermo* とよぶロゴスは「神の声にして知恵」である。第9章でラクタンティウスは、ほとんどすべての真理を探求したトリスメギストゥスが「言葉」の力と権威をしばしば書き記したとして、再度先のヘルメスの言葉を引用している⁽⁸³⁾。このラクタンティウスのロゴス＝キリスト論が、『ヨハネによる福音書』の冒頭個所の解釈に由来するものであることは言うまでもない。そこにはこう書かれてあった。「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。この言葉は神と共にあった。すべてものはこれによって造られた。…言葉は世にあった。世は彼によって造られたが、世は彼を知らずにいた」⁽⁸⁴⁾。

ラクタンティウスは、これまで受肉する以前の「神の子」＝ロゴス＝キリストについて語ってきたが、この後の章ではそれ以後のイエス・キリストの降誕・生・奇跡・受難・死・復活が順を追って語られることになる。シエナ大聖堂舗床上のヘルメスの言葉は、明らかにこうしたラクタンティウスのロゴス＝キリスト論を踏まえて刻まれた。それが“*QUI APPELLATUR SANCTUM VERBUM*”という、ラクタンティウスが伝える『アスクレピオス』断片にはない付加部分を産み出すことになったと思われるのである。この付加部分に関しては、従来は『ヘルメス選集』第1冊子に見える記述の影響とされてきた。ここでは世界の創造過程が詳述されているのであるが、「世界の素材」の形成に関して「ヌースから出た輝くロゴスは神の子である」という表現があり、この「輝くロゴス」が「湿潤なフュシス」に乗って四元素が作られるとされている⁽⁸⁵⁾。しかしラクタンティウスは、この一節には言及しておらず、付加部分は先に見た『神学綱要』によってのみ伝えられる「ヘルメス文書」断片に依っていると考えるべきであろう⁽⁸⁶⁾。

結 語

われわれは、シエナ大聖堂舗床に描かれたヘルメスとシビュラの像を、そこに記されたラテン文の解釈をしながら考察してきた。そして明らかになったことは、ヘルメスの場合もシビュラの場合も、ラクタンティウス『神学綱要』に多くを負っているということである。その影響は、たんに個々の託宣やヘルメスの言葉が『神学綱要』から取られたものであるという点にあるだけではなく、託宣や言葉の解釈にも及んでいる。そして、ヘルメスとシビュラをある統一において捉えようとするとき、再び『神学綱要』が重要な鍵となるように思われる。すでに述べたように、シビュラたちは、キリストの本性・降誕・奇跡・受難・死・復活を宣べ伝えていた。ヘルメスは、神が「聖なる言葉」と呼ばれる自己の子を造ったことを語っていた。他方、ラクタンティウスは「神の子は二度生まれた」と述べていた。そして、このラクタンティウスの理解に従うならば、シエナ大聖堂舗床上のヘルメスは「霊において生まれた神の子」を、シビュラは「肉において生まれた神の子」を、それぞれ予言していることになるのである。こうして、ヘルメスとシビュラは、「神の子」をめぐって一つの意味ある文脈を形成することになる。そして、この文脈が実際に大聖堂内に描かれることになった背景には、上述したような宗教的・思想的潮流があったのである。

註

引用頻度が高い「ヘルメス文書」と『シビュラの託宣』、及びラクタンティウスとフィチーノ著作は次のように略記する。

CH = *Corpus hermeticum* ; Ascl. = *Asclepius*, ed. A. D. Nock, *Hermès Trismégiste*, tom. 1-2, Paris 1946. (荒井献・柴田有訳『ヘルメス文書』朝日出版社、ただし『ヘルメス選集』のみ)

Orac. Sibyl. = *Oracula Sibyllina*, ed. J. Geffcken, Leipzig 1902 [New York 1979]. (柴田有訳、教文館「聖書外典偽典」3に所収、ただし抄訳)

Lact., *Div. inst.* = Lactantius, *Divinae institutiones*, ed. S. Brandt, Wien 1890.

Ficino, *Op. om.* = *Opera omnia*, Basileae 1586 [Torino 1959].

- (1) *Hermetica*, ed. W. Scott, vol. 1, Oxford 1924 ; F. A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, Chicago-London 1964.
 - (2) Cf. *Hermetica*, pp. 32-33 ; Yates, *op. cit.*, pp. 42-43 ; A. J. Festugière, *Hermétisme et mystique païenne*, Paris 1967, pp. 28-29 ; E. Garin, *Medioevo e Rinascimento*, Roma-Bari 1973, pp. 145-146 ; A. Chastel, *Marsile Ficin et l'art*, Genève 1954, p. 158 ; Idem, *Art et humanisme à Florence au temps de Laurent le Magnifique*, Paris 1982, p. 250 ; E. Iversen, *The Myth of Egypt and its Hieroglyphs in European Tradition*, Copenhagen 1961, p. 60.
 - (3) 内陣に向かって身廊右側のデルポイのシビュラとクマエ[キメリア]のシュビラの間には、“TEMPORE・D・ALBERTI・D・FRAN・ARINGHERII EQVITIS RHODII/HEE QUINQUE SIBILAE POSITE SUNT MCCCCLXXXII”、左側のリビアのシビュラとヘレスポントスのシュビラの間には“TEMPORE・D・ALBERTI…MCCCCLXXXIII”と書かれた石版が埋め込められている。Cf. Sigmondo Tizio, *Historiarum Senensium*, vol. 6, Ms. Biblioteca Comunale di Siena, Cod. B III 9, pp. 66 a-b, 87 a ; G. Milanesi, *Documenti per la storia dell'arte senese*, vol. 2, Siena 1854, pp. 377-379 ; R. H. H. Cust, *The Pavimento Masters of Siena (1369-1562)*, London 1901, pp. 31-32.
- 舗床全体に関しては、Tizio, Milanesi, Cust の前掲書の他、次の研究を参照。A. Landi, *Descrizione del Pavimento del Duomo di Siena*, in G. della Valle, *Lettere Senesi*, vol. 3, Roma 1786, pp. 124-157 ; E. Micheli, *Il pavimento del Duomo di Siena*, Siena 1870 ; L. Mussini, *Il pavimento del Duomo di Siena e il prof. Alessandro Franchi*, Firenze 1880 ; G. Cecchini, *Il pavimento della Cattedrale di Siena*, Siena [1930] ; F. Ohly, *Die Kathedrale als Zeitenraum. Zum Dom von Siena*, in Idem, *Schriften zur mittelalterlichen Bedeutungsforshung*, Darmstadt 1977, S. 171-273 ; B. Santi, *Il pavimento del Duomo di Siena*, Firenze 1982.
- (4) Cf. Landi, *op. cit.*, p. 104 ; Cust, *op. cit.*, p. 23.
 - (5) Diers-Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Fr. 22 B 92.
 - (6) Aristphanes, *Pax* 1095, 1116 ; Plato, *Phaedrus* 244 B ; *Theges* 124 D.
 - (7) ap. Lact., *Div. inst.* 1. 6. 8-11, pp. 21-22.
 - (8) Cf. Dionysius Halicarnassensis, 4. 62. 1-6 ; Plinius, *Historia naturalis* 13. 88 ; Lact., *Div. inst.* 1. 6. 10-11.
 - (9) シビュラと『シビュラの託宣』に関する研究文献については、J. Quastin, *Patrology*, I, Utrencht-Bruxell 1950, pp. 168-170 ; A. Momigliano, *Sibylline Oracles*, in *The Encyclopedia of Religion*, vol. 13, New York-London 1987, pp. 305-308 を参照。
 - (10) Clemens Alexandreus, *Protrepticus* 4. 71, 8. 77 ; *Stromata* 1. 21. 108, 5. 14. 108, 115, 6. 5. 43 ; Athenagoras, *Legatio* 2. 9 ; Terturianus, *Ad nationes* 2. 12 ; *Apologia* 19. 10 ; Theophilus, *Ad Autolyicum* 2. 36 ; Origenes, *Contra Celsum* 5. 61.
 - (11) Ps. -Constantinus, *Oratio ad sanctorum coetum* 18. cf. *Orac. Sibyl.* 8. 217-243, pp.

151-155.

- (12) Cf. A. -J. Festugière, *La Révélation d'Hermès Trismégiste*, I, Paris 1950, pp. 67-73.
- (13) Cicero, *De natura deorum* 3. 22. 56.
- (14) 「ヘルメス文書」に関しては、邦訳「解説」及びそこに挙げられている研究を参照。
- (15) Athenagoras, *Libellus pro Christianis* 28 ; Terturianus, *Adversus Valentianos* 15 ;
De anima 2, 28, 33.
- (16) Lact., *Div. inst.* 1. 6. 2-4, p. 19. Cf. Yates, *op. cit.*, pp. 7-9.
- (17) Lact., *Div. inst.* 1. 6. 8-16, pp. 21-23.
- (18) Cf. R. Pichon, *Lactance*, Paris 1901, pp. 209-213.
- (19) Augustinus, *De civitate dei* 18. 23. (大島春子・岡部昌雄訳、教文館「アウグスティヌス著作集」第14巻、309-311頁。)
- (20) *Ibid.* (邦訳、311-312頁。)
- (21) *Ibid.*, 8. 23. (茂泉昭男・野町啓訳、同上著作集、第12巻、217-221頁。)
- (22) *Ibid.* (邦訳、221頁。) Cf. Yates, *op. cit.*, pp. 9-11.
- (23) Honorarius, *Gemma animae* 3. 4.
- (24) Tommaso da Celano, *Dies irae* ; “Dies irae, dies illa, Solvet seaculum in favilla,
Teste David cum Sibylla.”
- (25) Thomas Aquinas, *Summa theologiae* P. 2-2 q. 2 a. 7.
- (26) Isidorus, *Origines sive Etymologiae* 8. 8 ; Beda, *Sibyllinorum verborum interpretatio*,
PL 90, col. 1181 B.
- (27) Cf. E. Mâle, *L'Art religieux de la fin du Moyen-âge*, Paris 1922, p. 255 ; L. Réau,
Iconographie de L'art chrétien, II, 1, Paris 1956, pp. 421-424.
- (28) *Prophetie XII sibillarum de incarnatione Christi*, ed. M. Hélin, in Idem, *Un Text inédit sur l'iconographie des Sibylles*, *Revue Belge de Philologie et d'Histoire*, 15 (1936), pp. 359-363.
- (29) Philippus de Barberiis, *Discordantiae sanctorum doctorum Hieronymi et Augusti*,
Romae 1481, foll. 6 B ss. [ap. Mâle, *op. cit.*, pp. 258-260.]
- (30) 中世・ルネサンスにおける美術上のシビュラの表現については、Chastel, *op. cit.*, pp. 236-240 ; A. Rossi, *Le Sibille nelle arti figurative italiane*, *L'arte*, 18 (1915), pp. 209-221, 272-285, 427-458 ; 若葉みどり「シビュラ（巫女）の研究（part I）」、『地中海学研究』9 (1986)、47-82頁を参照。
- (31) Cf. Mâle, *op. cit.*, p. 158 ; Réau, *op. cit.*, p. 424. ただし、Cf. Hélin, *op. cit.* p. 351.
- (32) Cf. B. L. Ullman, *The Humanism of Coluccio Salutati*, Padova 1964, pp. 234, 258.
- (33) Cf. Ch. L. Stinger, *Humanism and the Church Fathers : Ambrogio Traversari (1386-1439) and Christian Antiquity in the Italian Renaissance*, Albany 1977, p. 119.
- (34) Bruni, *De studiis et litteris*, ed. H. Baron, in *Humanistische-philosophische Schriften*, Leipzig-Berlin 1928, p. 8 ; Manetti, *De dignitate et excellentia hominis* 2, ed. F. R. Leonaedo, Padova 1975, p. 35.

- (35) “Pimander” という題は、正確には『ヘルメス選集』第一冊子の「ヘルメス・トリスメギストースなるポイマンドレース」だけに対応するのであるが、フィチーノはそれによって全冊子を代表させた。ルネサンス期における「ヘルメス文書」とヘルメス主義の影響については、Yates, *op. cit.*; Garin, *op. cit.*, pp. 67-77 の他、次の研究を参照。P. O. Kristeller, *Marsilio Ficino e Ludovico Lazzarelli : Contributo alla diffusione delle idee ermetiche nel Rinascimento*, in Idem, *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Roma 1956, pp. 221-247; E. Garin, *Nota sull'ermetismo*, in Idem, *La cultura filosofica del Rinascimento italiano*, Firenze 1979, pp. 143-154; K. H. Dannenfeld, *Hermetica philosophica*, in P. O. Kristeller (ed.), *Catalogus translationum et commentariorum*, vol. 1, Washington 1960, pp. 137-151; 根占献一「フィチーノとヘルメス」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』第6集(1980)、207-216頁。
- (36) Ficino, *Argumentum in librum Mercurii Trismegisti*, *Op. om.* p. 1836.
- (37) *Ibid.*
- (38) ルネサンス期における「ヘルメス文書」の受容においては、「古代神学」*prisca theologia* の概念が重要な意味をもってくるのであるが、紙幅の関係上ここでは詳述できない。次の研究を参照されたい。D. P. Walker, *The Ancient Theology : Studies in Christian Platonism from the Fifteenth to the Eighteenth Century*, London 1972; Ch. B. Schmitt, *Prisca theologia e Philosophia perennis : Due temi del Rinascimento italiano e la loro fortuna*, in G. S. Tarugi (ed.), *Il pensiero italiano del Rinascimento e il tempo nostro*, Firenze 1970, pp. 211-236; Ch. Trinkaus, *In Our Image and Likeness : Humanity and Divinity in Italian Humanist Thought*, 2 vols., London-Chicago 1970, pp. 683-760.
- (39) Ficino, *op. cit.*, p. 1836.
- (40) Ficino, *De christiana religione* 24-25, *Op. om.*, pp. 26-29.
- (41) *Ibid.* 24, p. 27. この託宣については後出。註56を参照。
- (42) *Ibid.* 25, p. 29.
- (43) *Mercurii Trismegisti Pimander seu de potestate et sapientia Dei*, Tarvisii 1471, fol. [48].
- (44) *CH*, XII, 19, pp. 181-182. (邦訳、323頁。)
- (45) Ms. Biblioteca Laurenziana, Laur. 21. 8, fol. 34v. この事実は、F. Purnell, Jr., *Hermes and the Sibyl : A Note on Ficino's <Pimander>*, *Renaissance Quarterly*, 30 (1977), pp. 305-310 によって明らかにされた。
- (46) Pico della Mirandola, *Conclusiones sive Theses DCCCC*, ed. B. Kieszowski, Genève 1973, p. 50.
- (47) Ludovico Lazzarelli, *Crater Hermetis*, ed. M. Bruni, in *Testi umanistici su l'ermetismo*, Roma 1955 p. 56.
- (48) *Ibid.*, p. 69. ラザレリについては、Kristeller, *op. cit.* を参照。
- (49) Antonio degli Agli, *De racionibus fidei*, Ms. Biblioteca Nazionale Centrale di

Firenze, Conv. soppr. B 9 1268, fol. 19 v.

- (50) アリはカレッジで催されたプラトンを称える集会に出席した一人である。Cf. Ficino, *Commetarium in Convivium Platonis, de amore*, ed. R. Marcel, Paris 1956, pp. 136-137.
- (51) アリの著作はそのほとんどが未刊で、まとまった研究も存在しない。さしあたっては次のものを参照されたい。Vespasiano da Bisticci, *Le vite*, ed. A. Greco, vol. 1, Firenze 1970, p. 295; Della Torre, *Storia dell'Accademia platonica di Firenze*, Firenze 1902 [Torino 1968], pp. 775-776, 814; A. D'Addario, *Agli, Antonio*, in *Dizionario biografico degli Italiani*, vol. 1, Roma 1960, pp. 400-401; F. Quinterio, *Riflessi umanistici negli interventi di Antonio degli Agli al Santuario dell'Impruneta*, in *Impruneta: una pieve, un paese*, Firenze 1983, pp. 137-151.
- (52) Lact., *Div. inst.* 1. 6. 8-11, pp. 21-22.
- (53) *Div. inst.* 4. 6. 5, p. 250. [*Orac. Sibyl.* 8. 329, p. 163.]
- (54) *Div. inst.* 4. 19. 10, p. 363. [*Orac. Sibyl.* 8. 312-4, p. 162.]
- (55) Vergilius, *Aeneis* 4; Cf. Ovidius, *Metamorphoses* 14. 101-153.
- (56) Vergilius, *Ecloga* 4. 4-7.
- (57) *Prophetie XII sibillarum de incarnatione Christi*, ed. cit., p. 361; Barbieri, ap. Mâle, *op. cit.*, p. 259.
- (58) Lact., *Div. inst.* 1. 6. 14, p. 23.
- (59) *Prophetie XII sibillarum*..., ed. cit., p. 360; Barbieri, ap. Mâle, *op. cit.*, p. 260.
- (60) *Div. inst.* 4. 15. 18, p. 333. [*Orac. Sibyl.* 8. 275-278, p. 159.]
- (61) *Prophetie XII sibillarum*..., ed. cit., p. 362; Barbieri, ap. Mâle, *op. cit.*, p. 260.
- (62) *Div. inst.* 4. 18. 20, p. 355. [*Orac. Sibyl.* 4. 22-24, pp. 131-132.]
- (63) *Div. inst.* 1. 6. 16, p. 25. [*Orac. Sibyl.* 8. 377, p. 166.]
- (64) [1] *Div. inst.* 7. 16. 11, p. 632. [*Orac. Sibyl.* 8. 239, p. 156.] [2] *Div. inst.* 7. 20. 3, p. 648. [*Orac. Sibyl.* 8. 241-242, p. 156.] [3] *Div. inst.* 7. 23. 4, p. 657. [*Orac. Sibyl.* 4. 42-43, p. 93.]
- (65) Cf. Cust, *op. cit.*, p. 50; Santi, *op. cit.*, p. 11.
- (66) [1] *Div. inst.* 4. 18. 19, p. 354. [*Orac. Sibyl.* 8. 303-304, p. 161.] [2] *Div. inst.* 4. 19. 5, p. 361. [*Orac. Sibyl.* 8. 305-306, p. 161.]
- (67) A [1] *Div. inst.* 4. 18. 17, p. 353. [*Orac. Sibyl.* 8. 292, p. 160.] A [2] *Div. inst.* 4. 18. 15, p. 353. [*Orac. Sibyl.* 8. 289, p. 160.] B [1] *Div. inst.* 4. 18. 15, p. 352. [*Orac. Sibyl.* 8. 287-288, p. 160.] B [2] *Ibid.* 4. 16, 17, p. 342. [*Orac. Sibyl.* 8. 257, p. 158.]
- (68) 誤解のないように言い添えておけば、両作品に見い出されるのは、クマエ、エリュトライ、アルブネアのシビュラの託宣だけであり、舗床に刻まれた諸託宣の第一の源泉を両作品に求めることはできない。
- (69) この託宣は、フィチーノだけではなく、ルネサンス期の多くの著作家によってキリストの降誕を予言するものとして引用されている。例えば、Bruni, *op. cit.*, p. 15; Salutati, *De laboribus Herculis*, prima editio 2. 20, ed. B. L. Ullman, Zürich 1951, p. 619.

- (70) Ficino, *De christiana religione* 25, *Op. om.*, p. 28. Cf. Augustinus, *De civitate Dei* 18. 23. アウグスティヌスのテキストに含まれている託宣は、テキストに並べられている順に示すと、リビア B [1]、リビア A [2]、リビア A [1]、ヘレスポントス [1]、サモス、ヘレスポントス [2]、キメリアである。フィチーノのテキストの中にはこの他に、デルポイ、ペルシア、リビア B [2] が見い出される。
- (71) 註 13・16・36 を参照。
- (72) Yates, *op. cit.*, p. 42. Landi (*op. cit.*, p. 110) は、両者を知識と真の法律を受け取る気高さを表していると考えたが、多くの研究者は、東洋と西洋を象徴している (Cecchini, *op. cit.*, p. 5; Santi, *op. cit.*, p. 7; E. Carli, *Il Duomo di Siena*, Siena 1979, p. 151)、あるいは、東洋と西洋の知者を示している (Cust, *op. cit.*, p. 22; Ohly, *op. cit.*, S. 205) と考えている。Scott (*op. cit.*, p. 33) は、前者はエジプト人を、後者は「プラトンと、おそらくはフィチーノのようなイタリアの学者を含むプラトン主義者」を代表するものと解している。
- (73) Cf. Augustinus, *De civitate Dei* 18. 29; Ficino, *Argumentum in lib. Mercurii*, *Op. om.*, p. 1836.
- (74) このスフィンクスについては A. Chasttel, *Notes sur le Sphinx à la Renaissance*, in *Umanesimo e simbolismo*, *Archivio di Filosofia*, Padova 1958, pp. 179-182 を参照。
- (75) Lact., *Div. inst.* 4. 6. 4-5, pp. 286-288. Cf. *Ascl.* 8, pp. 304-305.
- (76) 実際、Festugière は “secundum” と訂正して舗床の言葉を引用している (*Hermétisme et mystique païenne*, *cit.*, p. 28.)。
- (77) Cf. *CH* VIII. 1; IX. 8; X. 14.
- (78) *Div. inst.* 4. 6. 9, p. 191.
- (79) *CH* I. 9, p. 9. (邦訳、56 頁。)
- (80) *Div. inst.* 4. 7. 3, p. 293. この断片はラクタンティウスによってだけ伝えられているものである。Cf. *Hermès Trismégiste*, tom. 4, Paris 1954, *Frag. div.* 12a, p. 111.
- (81) ラクタンティウスにおける「神の子」の概念については次の研究を参照。Pichon, *op. cit.*, pp. 116-122; V. Loi, *Lattanzio nella storia del linguaggio e del pensiero teologico pre-niceno*, Zürich 1970, pp. 201-232; P. Monet, *Lactance et la Bible*, Paris 1982, t. 1, pp. 165-190; 柴田有『グノーシスと古代宇宙論』(勁草書房) 241-245 頁。
- (82) *Div. inst.* 4. 8. 1, p. 295.
- (83) *Div. inst.* 4. 9. 3, pp. 300-301.
- (84) *Ioh.* 1. 1-3, 9-10.
- (85) *CH* I. 6, p. 8.
- (86) “secudum” が “secum” と刻まれた点に関しては、ヨハネによる福音書を念頭においた、意識的なものであったと推測することも可能であろう。

付記一小論はイタリア政府奨学金 (1984-85、1985-86 学年度) 及び北海道大学国際交流基金 (1987 年度) による研究成果の一部である。また平賀繁行氏にお世話になった。

Ermete e le Sibille

—Nota sul Pavimento del Duomo di Siena

Hiroaki Ito

Sul Pavimento del Duomo di Siena, si vedono le figure d'Ermete e delle dieci Sibille. Queste furono raffigurate da vari artisti sotto la guida del Rettore dell'Opera del Duomo, Alberto Aringhieri nel tardo Quattrocento.

(1) Le Sibille furono originariamente profetesse in Grecia antica. Nel Medioevo, però, erano considerate le donne che predissero la venuta del cristianesimo nelle varie regioni pagane. Anche Ermete, a cui erano attribuite le vaste opere, fu riferito come profeta egiziano sul cristianesimo, per esempio, nel *Divinae institutiones* di Lattanzio, ma Agostino accusò la falsità della dottrina ermetica nel suo *De civitate Dei*.

(2) Nel periodo umanistico, il pensiero ermetico rigenerò e venne divulgato in Italia. Marsilio Ficino, che tradusse il *Corpus hermeticum*, appoggiandosi sulle testimonianze di Lattanzio, insisté che Ermete vaticinò la venuta di Cristo come le Sibille facero. La sua opinione ebbe una grand'influenza sui pensatori religiosi e filosofici del suo tempo.

(3) Gli oracoli, che sono scritti presso le dieci Sibille, alludono alla nascita, al miracolo, alla flagellazione, alla passione, alla resurrezione di Gesù e al giudizio finale. Si pensa che le frasi d'oracoli sono prese principalmente dal *Divinae institutiones*.

(4) Ermete si appoggia a una tabella, nella quale è scritta la frase che allude alla creazione del "Dio visibile, Figlio che è appellato il Sacro Verbo", cioè, del Logos = Cristo prima d'incarnazione. Questa frase deriva dai frammenti che sono citati in greco presso il *Divinae institutiones*.

Lattanzio, la cui opera fu utilizzata dal Rettore Aringhieri, dice che Cristo fu nato due volte; prima in spirito, poi in carne. Consultando questa opinione di Lattanzio, si conclude che sul Pavimento del Duomo, Ermete profezia Cristo nato in spirito e le Sibille profeziano Cristo nato in carne, ed Ermete e le Sibille rappresentano la significazione unificativa.